勢を卒して三千餘騎、東山道より近江國へ打出て、瀨田近くすゝむ所に、山徒等橋を引間、野路邊へ陣をとりたりけるに、新田脇屋を大將として、湖水を渡して散々に合戰いたしけれども貞宗打勝たり、

〔祇園執行日記〕貞和六年十二月五日、江州御敵儀、峨高山寄來勢多邊御方陣（守護佐々木判官舍弟五郎右衞門）之間、一合戰之後守護畢、退散之間、自敵方勢田橋燒落云々、

〔室町殿伊勢御參宮記〕應永卅一の年極月の十日あまりよつと申に、室町殿（足利義量）伊勢御參宮あり、（中略）勢田の橋はほどなく雲はれて、さだかに見えわたさるゝほどなり、

風わたる跡よりやがて雲はれて浪に横ぎる瀨田の長橋

〔伊勢紀行〕勢田のはし渡り侍るとて

あふみ路や勢田の長橋日もながしいそがでわたれ春の旅人

〔立川寺年代記（後花園）〕文安三年丙寅夏、江州大水出、瀨田橋落、　五年戊辰五月九日、大雨長降、天下大水、損破多、此年又瀨田橋落、

〔宇和郡舊記（享）〕板島殿之事

一板島丸串城主は、西園寺公廣卿御連枝、宣久公なり、（中略）伊勢參詣の時、海陸の記あり、口は切て鞆（備後國）より有、（中略）於勢田橋、

世の中をわたる心は近江なる勢田の橋さへかぎりもぞある

〔信長公記（八）〕天正三年十月十二日、勢田の橋出來申に付て、可被成御一見爲、陸を御上京事も、生便敷橋の次第也、各被驚耳目候、

〔信長公記（十二）〕天正七年十一月三日、信長公御上洛、其日瀨田橋御茶屋に御泊、御番衆御祇候之御衆へ、しろの御鷹見せさせられ、次日御出京、